

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

## 謫仙の構造

著者	山田 利明
著者別名	Toshiaki Yamada
雑誌名	東洋大学中国哲学文学科紀要
号	21
ページ	43-59
発行年	2013-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00004177/">http://id.nii.ac.jp/1060/00004177/</a>

## 謫仙の構造

山田利明

謫仙とは、過失を得て罰として神仙界を追放され、俗界に流謫された仙人をいう。俗世に流されても、仙人は仙人であって、その不死の性が変わるわけでもないし、そのもつ仙術の効験がなくなるわけでもない。そのかわり、二十年、五十年、場合によっては百年という長い罪期を人間界で過ごさねばならない。

仙人が架空の存在である以上、謫仙もまた架空の説話として流布したが、しかしそれは、単なる物語としてではなく、事実と架空とが錯綜する複雑な状況を現出する。そこには、仙道に関わる修行法や経典などが記されて、実際に道士や修行者が行ったであろう修法が再現されている。

ここでは、謫仙の説話に描かれた物語の構造と、修法などから当時（唐代）の神仙信仰の状況などを明らかにしてみ<sup>①</sup>る。

1

仙人がどのような状態で人間界に流されるのか、その一、二の例を挙げてみる。

秀才権同休、元和中落第、旅遊蘇湖間、遇疾貧窘、走使者本村墅人、顧已一年矣、疾中思甘豆湯、令其市甘草、顧者久而不去、但具湯火來、秀才且意其怠於祇承、復見折樹枝盈握、仍再三搓之、微近火上、忽成甘草、秀才心大異之、且意必道者、良久取羶沙數坏、授將已成豆矣、及湯成、與常無異、疾亦漸差、秀才謂曰、予貧迫若此、無以寸進、因褫垢衣授之、可以此辦少酒肉、

権同休秀才は元和年間の科挙試に落ち、蘇州・洞庭湖あたりに遊覧したが、たまたま病氣となり金をつかいはたして困窮した。もとの村から百姓の男を従者として傭い、すでに一年ほど使っていた。病中、甘豆湯（甘草と豆の汁）を食べたいと思い、その男に甘草を買いに行かせようとしたが、従者はしばらく経っても出かけない。ただ湯と火を用意しただけであった。秀才はしばし言いつけを怠けているのかと思っていると、男は木の枝を折って握り二、三回手でこすり、火の上に近づけると、たちまちそれが甘草に変化した。秀才は大変不思議なことと思い、男が道術をよくするものであると考えた。やや久しくして、粗い砂を数回手にとり、揉むと豆となった。それを用いて甘豆湯が出来あがる。普通の甘豆湯と全く変わるところはない。病氣も少しずつ癒えてきた。秀才は、「私の貧苦まことに此の如し、一寸つつ進もうとしてもそれも出来ぬ。すまぬがこの汚くなった衣服を脱いでお前にやるから、いささかの酒と肉に換えるがよい」と。

これは段成式『酉陽雜俎』卷二に採られる「権同休友人」の話である。友人とはいうものの、もとはここに記される田夫の従者であり、その従者が謫仙であつたことが後に明らかにされる。人間に謫じんかんされたものであるから、仙人といえども安閑としてはられない。むしろ権秀才のような困窮者に従つて苦勞しながら、罪期の明けるのを待つ、という設定になるが、謫仙自身は仙術をつかい、一向に困苦することもない。むしろその仙術を用いて主人や周囲の者に奉仕する。後半部を続ける。

將會村老、丐少道路資也、顧者微笑曰、此固不足辦、某當營之、乃斫一枯桑樹、成數筐扎、聚於盤上、噉之、遂成牛肉、復汲數瓶水、傾之、乃旨酒也、村老皆醉飽、獲束繚五十、秀才慙謝顧者曰、某本驕稚、不識道者、今返請為僕、顧者曰、予固異人、有少失謫於下賤、合役於秀才、若限不足、復須力於他人、請秀才勿變常、庶卒某事也、

そこで村の老人達に会い旅の費用を少しばかり得ようとした。従者は微笑していう、「こんな（汚い衣服）もので足りるわけがない。私に考えがある」。すなわち一本の枯れた桑の木を切り、いくつかの筐扎（札Ⅱ四角い札）を作り、それを大皿の上に集めて並べると、牛肉となった。さらに数本の瓶に水を入れて注ぐと、これは銘酒になつていた。村の長老たちはみな酔い飽食した。これで繚糸五十束を得ることができた。秀才は従者に恥じ入りながらも、「自分はもともと驕慢で「道」のことなど知らなかった。いま、私は却つてあなた様の従僕になりたい」という。従者がいう「私はもとより常人と異なるが、それはいささかの過失を犯したためにこの下賤な身に謫せ

られ、あなた様の労役に服しているもの。もし謫仙の期間が不足するようなことになれば、他の人の所で労役するしかない。だから秀才様、いつもと変わりなく私を引き回して欲しい」と。

結局、従者の素性を知った秀才は、恐れ多く今まで通りに使うことができず、逆に従者から、このままでは自分の謫期に支障が出るといわれる。従者はそこを去って、いずくに行つたのか分からない。

この話はかなり単純化されているが、謫仙のあり方を典型的に描いているので、ほぼ全文を録した。描かれる通り、謫仙は人間界に流されて苦役に従う。「人間」・「俗世」などとも称されるが、要するに俗世間であつて、それは天上神界からみればまさしく混濁の世界、汚らしい空間である。清浄な神仙の住む所ではない。しかもその濁世の下賤な身分にあつて、苦役に従う。

多くの場合、犯した罪は明らかにされない。ただ「小失」・「小過」などと表現されるからあまり重大な過失とは思われない。通常の場合、謫とは官位・官職を降格され、地方の、それも辺境の官に任ぜられることを指すから、いわゆる左遷に類するものと考えてよい。配所は俗世、身分は下男（女）に落とされる。もともと天上界の構成は、現実の宮廷の制度に倣つて構想されるから、その賞罰制度も現実の反映と見なければならぬ。問題は、大過の際にはどうなつたのかということである。例えば『後漢書』方術伝に神符によつて邪鬼を調伏する費長房が記されるが、ある時この神符を亡失する。たちまち邪鬼の殺すところとなる。神勅の符を失うことは、皇帝の勅書を失うことと同等であることを考えると、邪鬼にとり殺されたのは死刑に値すると考えてよい。重大な過失である。ただし、こうした仙人（方士）の死刑譚はあまり歓迎されない。仙人伝の性格からいえば当然であらう。

六朝期の成立と考えられる『漢武内伝』に、後漢の方士東方朔の話がある。地氣に通達した東方朔は、「山水の遊

戯に務めるのみにして、共に氣を和するを図らず。雷電を擅弄して波を激し風を揚げ風雨時を失う。陰陽錯遷す」とあるから、水害、風害共に至った。山水の遊覧に呆けて職務を忘れたことから謫せられた。失策によつて人間世界に大災害が及んでも流謫ですんだ。神符を亡くすような神に対する失策は死、民に対する失策は謫ということになる。これはそのまま現実の皇帝に対する過失と人民に対する過失を示したものと考えてよい。

もう一つ、生まれた子供が謫仙であつたという特異な例を挙げておく。日本の『竹取物語』は、竹から出た女子が成人して天上界に帰るといふ構成を採るが、この場合は人から生まれた女子が、謫期満ちて天上界に帰るといふ筋立になる。

黄觀福者、雅州百丈県民女也、幼不茹葷血、好清静、家貧無香、以柏葉柏子焚之、每凝然静坐、無所營為、經日不捲、或食柏葉、飲水自給、不嗜五穀、父母憐之、率任其意、既笄欲嫁之、忽謂父母曰、門前水中極有異物、女常時多與父母說奇事先兆、往往信驗、聞之因以為然、随往看之、水果來洶涌、乃自投水中、良久不出、漉之得一古木天尊像、金彩既駁、狀貌與女無異、水即澄清、便以木像置道路上、號泣而歸、其母時來視之、憶念不已、忽有綵雲仙榮、引衛甚多、與女子三人、下其庭中、謂父母曰、女本上清仙人也、有小過謫在人間、年限既畢、復歸天上、無至憂念也、……（『集仙伝』）

黄觀福は雅州百丈県民の娘である。幼兒より葷菜などのなま臭野菜や肉などを食わず、清静なる行いを好んだ。家は貧しかったため香などは無く、ただ柏の葉やその実を焚いて替りとした。つねにじつとして静坐し他になすことなし。数日を経ても倦きず、あるいは柏の葉を食べ水を飲んで足りた。五穀も食わずにいることから、父母

は大変に心配したが、ついに自分自身の意志にまかせるようになった。成人して髪を改めると、そろそろ嫁に出す決心をした。すると急に父母に向かつていう。「門前にある池の中に非常な異物がある」と。娘は常日頃から父母と奇怪な話し、何事かの前兆について話していた。それはしばしば効験をあらわしたので、この娘の話しを聞いて、真実と思つた。娘とともに行ってみると、はたして門前には水が湧き出して池となつていた。娘はやおら水中に飛び込み、しばらくしても出てこない。池をさらってみると、一体の古い天尊の木像があつた。金彩はすでにまばらに残るだけであるが、その表情は娘と瓜二つ、何の異なるところもなかった。木像を道端に置き、号泣して家に入る。その母は時おりやって来ては、これを見て娘を思う情ついに止むことがなかった。その時、色どり鮮やかな仙雲と神仙の音楽が響き、衛士を沢山引きつれた三人の女子が天上より庭に降り立ち、父母にいう、「娘はもと上清の仙人であつたが、小過があつたので人間に謫せられたもの。年限がきたので天上に帰つた。それほどまでに深く悲しむことはない」と。

このあと、三人の玉女は、この地に悪疫が襲う。死者多数が出る。よろしく家を益州に移せとて、黄金を与えて去る。父母はその言葉に従い、家を蜀に移したが、果たせるかなその歳に悪疫来たり死者は十人のうち三・四人。唐の麟徳年間のことであつたと記す。題は「黄観福」とするが、今は俗に「黄冠仏」ともいう。天尊が道教神像であることがわからず、語り伝えるうちに「黄冠福」を「黄冠仏」と誤り伝えたとも記す。そうなると「黄観福」とはどうした訳であろうか。

ともあれ、これは胎児として謫されたわけで、生み育てた父母の恩に対する奉謝として、疫疾を避けさせたことが書かれる。実際に、唐の麟徳年間に雅州を中心に人口の三・四割が死没する程の毒症が流行したのか否か、精査する

余裕を持たないが、そうした伝承を背景に書かれたものと考えてよい。ここが虚実錯綜するところである。

黄観福は、男子の謫仙と異り、苦役に従うこともなければ、離別の悲しみに耐えることもない。淡々と成人し婚姻の話が出たのを契機に去った。すでにして常人とは異なる、人情を異にした世界の人であったということであろう。

## 2

謫仙は謫されても仙人であるから、黄観福のように、俗世の食物には見向きもせず、もっぱら柏葉のような仙薬を食べたり、清静無為の日常をおくるものも出てくる。特に婚姻の一件が出たのを期として去ったが、これは俗人と結ぶのを避けたのか、あるいは後に触れる理由もある。これに対して謫仙同士が結婚してしまうことが『仙伝拾遺』に載せられる。

陽平謫仙、不言姓氏、初九隴人張守珪、仙君山有茶園、每歲召採茶人力百餘人、男女傭功者雜處園中、有一少年、自言無親族、賃為摘茶、甚勤慇了慧、守珪憐之、以為義兒、又一女子、年二十、亦云無親族、願為義兒之妻、孝義端恪、守珪甚善之、

陽平の謫仙は姓名を云わなかった。始まりは九隴の張守珪という人がおり仙君山に茶園をもっていた。毎歳その時期になると茶摘みの人々百人余りを傭い入れた。男女の摘み手は園内に雑居して、その時期を過す。中に一少年あり。親族なしという。茶摘に従事したが、非常に勤勉であり賢い。守珪はこれをあわれんで、養子とした。



するともう一人の娘があらわれ、年は二十ばかり、これも親族なしという。そして養子の妻になりたいと言う。孝心、義理いずれも正しく、守珪は甚だこれを喜んだ。

一旦山水泛溢、市井路隔、塩酪既欠、守珪甚憂之、新婦曰、此可買耳、取錢出門数十歩、置錢於樹下、以杖叩樹、得塩酪而帰、後或有所需、但令叩樹取之、無不得者、其術夫亦能之、……守珪問其術受於何人、少年曰、我陽平洞中仙人耳、因有小過、謫人間、不久當去、

あるとき洪水が起り市中との道路は水没して、途絶した。ために塩や酪（チーズ）<sup>(5)</sup>などが欠乏し、守珪は非常にこれを心配していた。そこで新婦が、買いに行かなければならないとて、お金を持って門を出て数十歩進んだ。そこでお金を木の下に置いて杖をもってその木をたたくと、たちどころに塩と酪を得て帰ってきた。その後、求めるものがあれば、木をたたいて品物を出し、それを取らせた。得られないものはない。その術は夫もよく行うことができた。……守珪はその術を誰から受けたのかと問う。少年がいう「私は陽平洞天の仙人である。小過あつて人間に謫せられたが、近くここを去ることになる」と。

この後、守珪が洞天の様子を聞き、少年が詳しくその状を説明する。文末に至って、「旬日之間、忽失其夫婦」と記す。夫婦ともに天上界に帰ったのか、あるいは素性を知られたため、他に移ったのか。いずれにしても夫婦が謫仙であつたことになる。本来、人間の欲望を去り、清静であるべき仙人が、配匹を得て夫婦となるとはどういうことか。そこには房中術の存在が暗示されるが、神仙道あるいは道教におけるこれの評価はほぼ二分される。すなわち、五世

紀初期の寇謙之は道教の清整を図つてこれを禁絶した。<sup>(6)</sup>これに対し、同じ五世紀後半の南方道教を指導した陸修靜は、夫婦の間での一法のみを認め、その施用を許した。<sup>(7)</sup>しかし、上清派は、『真誥』中にしばしば見られるように、これに否定的で、禁欲無為を主とした。<sup>(8)</sup>同じ道教でありながら、肯定と否定とが相い雑る。これには仏教側の批判もあるし、上清派のように、仏教々理の影響を受けたことにもよる。ただし、道教の修法としてではなく、養生法として房中術は水面下で用いられる。

陽平謫仙の説法は、房中術を表面には出さず、夫婦として配匹することでこれを暗示したものと思われる。陸修靜の立場に通ずると考えてよい。

権同休・黄觀福・陽平謫仙の三者に共通するのは、それぞれが仕えた主人や両親の危急あるいは辛苦を救うところが記されていることである。権同休謫仙の場合は、主人から恩を受けたというより、むしろ全て謫仙が主人権同休を助けることに終始する。「小過」に対する罰は俗世に謫されたこと自体で贖われるが、人の急を救うのは功、すなわち善行である。そのことを如実に示すのが黄觀福である。黄觀福は水中に没して天上に帰ったが、その後に玉女三人が降つてその顛末を知らせ、さらに惡疫流行のことを述べて両親を救う。天上に復歸する前であれば、贖罪の一方法として理解できるが、これは復歸の後のことになる。両親に対する報恩ということになるが、そうなるとこれもまた修善ととらえられる。つまり贖罪としての人間じんかんにおける流謫とは別に、善功をたてる修善の行為が記されるのである。これは修善建功の思想が、かなり広く行われるようになったことと無縁ではない。もともと『抱朴子』にも記されるように、例えば三尸説（それを記したとされる『易内誡』『赤松子経』）は止惡の思想であり、惡行を行うことによって寿命を削られるとする。いわゆる奪算の思想である。これに対して、勸善の思想は、利他行の中に組み込まれていて、道教（靈宝経）の中では陸修靜以後の經典（『靈宝齋說燈祝願儀』）に明示される。しかしながら、五斗米道の

記録（『三国志』魏書・張魯伝注）によれば、三官手書による罪過の告白（止惡）と義舍・義米による勸善の思想が見られる。惡を犯さないことからさらに進んで、善を施すのを加算の一方法としたのか。天寿を全うするだけではなく、さらにその上に寿を加えるという理解が存在したことを示すといえる。

謫仙の善行が加算であるのかについては疑問が多いし、謫期を短縮する方法であつたのかも不明である。しかし、黄觀福の場合は明らかに謫期が終わつてからの報恩になる。

いずれにしても、罪を贖うこと、善功を建てるのが、謫仙説話の基本的な構造になっている。そしてその構造は、六朝末頃からの道教信仰を基盤にしていることが知られるのである。

### 3

如上の三人（陽平謫仙の婦を加えれば四人）の説話は、きわめて平明で分り易い。道教の經典や教理にかかわる記述もなく、特別な知識を必要とする内容ではない。ところが『伝奇』に記された許棲巖の謫仙譚はいささか複雑である。少し長文になるので要約を摘記しておく。

許棲巖は岐陽の人、進士に挙げられた。神仙の業を昊天観で修行し、毎朝夕必ず老子の真像を礼拝して長生を得る福運を祈願していた。許棲巖は蜀に行こうとして、市に出かけ馬を求めて金が足りず、やむを得ず西の市に行つて異民族の引く瘦せ馬を買つた。これに乗つて蜀に行く。途中きちんと糧秣を与えているが、馬は日々に痩せていく。はたして蜀に着けるか、易者に占つてもらうと、この馬は龍馬なり、よろしく宝とせよという。いよいよ難所の蜀の棧道にかかると、棲巖は馬もろとも崖の下に落ちた。幸い枯葉が厚く積つて怪我はなかったが出口も見つからない。崖

下に一洞穴のあるのを見つけ、馬とともにそれに入ると、中は洞天に通じていた。そこで太乙真君に出会い問われる。「俗世で神仙の道を修めたのか」と。答えていう、「老子、莊子、黄庭経の三つを読んだだけです」。また聞かれる、「三景の書のどの文句を会得したか」と。答えていう、「老子では「その精は甚だ真なり」の句、莊子では「これを息するに踵をもつてす」の句、黄庭経では但だ「卻寿無窮を思うのみ」の句です」と。こうした問答の後に何人かの神仙と会い話すうちに、棲巖は六朝の道士許長史の子孫であることが分る。あたえられた石髓を飲んだことで、千歳の寿命を得た。帰るに際し乗ってきた馬に乗って送られたが、別れに際して太乙君がいう。「この馬はわが洞天中の龍なり。怒つてとり入れた穀物を損つたので、荷役の作業に謫されたもの」と。

許長史は晋の道士許謐である。上清経の構造に関わり、上清教三代教主とされる。許棲巖はその名家の出である。生まれながらにして仙骨を有するが、『老子』『莊子』『黄庭経』を学習したというところが、ポイントである。『黄庭経』は家祖許長史が得た上清經典の中樞である。『黄庭内景経』『黄庭外景経』『黄庭中景経』の三景経に分れる。真人が棲巖に、「三景中どの文句を会得したか」と問うのは、そこをふまえての話になるのだが、実は『中景経』は隋唐頃の作と考えられるもので、本来の『黄庭経』とは異なる。内容的には『内景経』『外景経』の要を採ったものといわれる。ただし、許棲巖の答えは『老子』『莊子』『黄庭経』について述べているから、これも少し違う。『伝奇』の作者の誤りかも知れない。さらにいえば、許棲巖の述べた『黄庭経』の一句「但思以卻寿無窮」は、道藏本『黄庭内景経』に「但思一部寿無窮」とある部分である。この句の前には「泥丸九真皆有房、方圓一寸處此中、同服紫衣飛羅裳、但思一部寿無窮・・・」とあり、脳内の九宮に住む九真を論じたところで、「泥丸（脳部）の九真人はみなそれぞれ房室をもち、方円ともに一寸のところに住む。九真はいずれも紫衣を着てうす絹の裳をつけている。この九真の一体でも存思すれば寿命は無窮」というのである。泥丸の洞房存思の方法とその効能を記した部分。上清経の根本經典

『大洞真經』と関わる場所である。『大洞真經』は全篇身体神の冥想（存思）を説く。その中で最も効果のあるのがこの洞房神の存思である。『伝奇』の作者は字を誤って引用しているが、この洞房神存思の部分の引いたのは正しい。これこそが上清教の長生の要点であるからである。さすがに許長史の孫というべきである。

『老子』の「其精甚真」は第二章の言である。道の形態にふれて、道の中に精あり、その精ははなはだ真、というのである。ここが拡大敷衍されて、養生的解釈が始まるが、ここでは「道は精に充たされる」というべきところである。『莊子』の「真人之息以踵」の言も、「真人の呼吸は踵で息を吸うごとくにする」という意で、『莊子』大宗師篇の文は、「古之真人、……其息深深、其人之息以踵、衆人之息以喉」とある。「古の真人（古仙人）の呼吸は深く長く行い、気を十分に身体に巡らせる。したがって真人呼吸法は、踵から息をするようにするが、常人の呼吸は喉でするだけ」という。調息法、導引法の表現である。

これによつてみると、許棲巖の修行法は上清経にもとづく導引行気、存想法にあつたといえる。許棲巖の修行はほぼ完了しかかつていた。太乙真人は、この許棲巖の説明を聞き、「道を去ること近し」という。すぐに道と一体になれるということであろう。

許棲巖は謫仙ではない。許棲巖の買った瘦せ馬が謫された龍であつたというのである。仙人以外に、仙界の靈獣さえも過失があれば謫される。主題は許棲巖であるが、脇役として出た瘦せ馬が謫龍であつたというだけの物語りではあるが、この物語りからは二つの特徴を見ることができる。一つは許棲巖と許長史を結びつけたことによる上清教の教派性が描かれることである。殊に『黃庭經』を信仰する系統の仙法が広く知られていたことを示す可能性がある。

もう一つは、謫仙（謫龍）に出会うことが得仙・得道への運命として描かれることである。太乙真君が別れぎわに許棲巖に「貴君に仙骨があればこそ、この馬を買ったので、そうでなければどうしてこの太白山洞天に来ることがで

きただろう」といった言葉の中にその運命的な設定を見ることができよう。

この二つの特徴は、上清教あるいは『黃庭經』信奉者たちの間にある許長史信仰というようなものが、その子孫に投影されたとも考えられる。

この許棲巖と同姓の許碯という謫仙がいる。同姓であるが姻戚関係は不明。端正な性格の許棲巖とは全く反対の飄逸な仙人である。

許碯、自称高陽人也、少為進士、累舉不第、晚學道於玉屋山、周遊五山名洞府……無不遍歷、到處皆于石崖峭壁、人不及處、題曰、許碯自峨眉山尋偃月子到此、觀筆蹤者、莫不歎其神異、……常醉吟曰、今聞苑花前是醉鄉、踏翻王母九霞觴、群仙拍手嫌輕薄、謫向人間作酒狂、……（『續仙傳』）

許碯は自ら高陽の人という、若くして進士に進んだが結局科擧には合格しなかった。晩年に道を玉屋山で学び、五岳や名山洞天を周遊して遍歴しないところはなかった。行った場所の断崖絶壁によく「許碯峨眉山より偃月子を尋ねてここに到る」と書き、その筆蹟を見るものは、その神異の業に驚かないものはいない。……常に酔っては吟じていう「朗らかな苑中の花の前に設けられた宴会、西王母の九霞の酒杯を踏んでひっくり返した。仙人たちは拍手しておもしろがったが、王母はその軽薄な行いを嫌い、人間に謫されて酒狂となった」と。……

これは珍しく犯した過失が記される。酒宴で西王母の酒杯を足げにしてひっくり返した。お調子ものの仙人だったようである。洞天を歴巡したとあるのは、三十六洞天を全て巡ったのか。進士となり洞天での修行。謫されて俗界で

は好きな酒におぼれ、自らを酒狂と称している。こうなると謫仙というよりはむしろ遊仙であり、流謫の意味がない人が登れない絶壁に大きな文字を書いてその足跡を遺し、見る人を驚かす。俗世を楽しんでいるとしか思えない。

#### 4

先に謫仙同士の婚姻にふれた。ところが俗人の女と結婚した謫仙がいる。李仙人といい名は明かされない。要約のみを記す。

洛陽の高家の五女は非常に美人であつた。李仙人と再婚したが、李仙人は天上の謫仙であつた。高氏の娘と好縁を結んでより、洛陽に住み、黄白術（鍊金術）によつて金や銀を購うのを業とした。夫人にもその秘術を教えた。開元年間の末頃のことである。ある夜、空中より李を呼ぶ声が聞え門に出て誰かと話す。語り終つてもどつて来て、夫人にいう、「私は天仙であるが、微罪をもつて人間に譴謫された。その謫期が終り天上に呼びもどされた。行かねばならない。……私が去つたあととは、金銀鍊金の法によつて生活せよ。ただし、他人に伝えてはならぬ。この術が広まつてはならない。お前に害があるだけでなく、私にも不利となる。」ここまで言つて飛び去つた。夫人は初めはその通りにしていたが、後になると銀を商うこと多く、とうとう坊司（町役）に告発された。河南の知事李齊なるものそのことを知つたが、黙認して不問に付していた。密かに使いを出して夫人を呼び出す。その前後十床あまりの銀はすべて焼け、李齊は朝廷に報告した。一年たらずして、李齊と李仙人夫人も死んだ。（『廣異記』）

謫仙が俗人と結婚し、夫人に鍊金術を教え、天界に去つた後も夫人はその業を続けたが、町役に知られて最後には死ぬ。知事李齊は李仙人その人であろう。自ら決着をつけて死んだ。謫仙と俗人の結婚は、こうした悲劇をもたらす。

それは、神仙と俗人のもつ価値観の違いにある。俗人は無欲というわけにはいかない。本来、自らの得仙のための鍊金が、ここでは俗界のなりわいとして用いられる。しかし考えみれば、その罪の原因を作ったのは謫仙自身である。そのことはすでに謫仙の別れの言葉の中にあつて、罰は自分に及ぶという。

この二人の間に、子供はいない。神仙は子孫を残すことができないのか。これは少し複雑な問題である。

『太平広記』六七巻に崔少玄という女仙を記録する。その母はある夜、うす絹の衣服を着て赤龍に乗り、紫色の函をもつ神人を夢に見た。そして妊娠して十四ヶ月目に崔少玄を生んだ。実は少玄は玉華君という女神であつたが、かつて過失あつて人間に謫されたもの。廬陲なるものと結婚して二十三歳、天上に帰ることになる。

これは、夫が俗人、妻が女仙、子供はいないようである。但しこの崔少玄の母は、神仙と夢に感応して子を宿した。これは漢代頃からの神異を記した説話によくあらわれる伝統的な感応譚である。ただ、同じ謫仙を身ごもつた黄観福の母については、そうした感応譚が記されていない。玉女の言によれば黄観福は「上清仙人」の謫身という。男の神仙である。もとが女神である崔少玄は女子として生まれ、結婚したが、もとが男の神仙である黄観福は、結婚の話が出た途端天上に帰つた。「生む」能力、あるいは再生ということを託した設定と考えられる。もちろん男の神仙の場合も得仙自体が再生であり、得仙以前に生活した俗界を離れ、神仙界に再生する構図が描かれる。その時にはすでに無欲静清という新たな性を身につけた仙人であり、俗界に暮したときの人物とは異なる。

謫仙にかかわる文献は、ここに挙げた以外にも多くあるが、その中でも得仙した経緯を見ると、洞天で道を学び修業したという記事は少なくない。得仙を再生として考えたとき洞天はまさしく母の子宮として理解することができる。洞天での修業期間は、いわば胎児の時代で、得仙は神仙界への出生となる。得仙するには一旦母の胎内にもどり、生れ変つて神仙として出発する。



さて、謫仙である。謫されかたに二通りある。一つは胎児として、一つはそのままの仙人の性をもつてである。後者についていえば、現世が異境・流謫の辺境とされるだけで、その中で苦役に従事するという現実の投影である。前者は、例えば黄觀福の場合、幼児から神仙の修行を継続していた。家は貧しかったが苦役に従事することもなく、修行を続けてついに帰った。現世での再びの修養という位置づけになろう。崔少玄の場合は、あるいは結婚という俗世の縁が夫の廬陞を好道の高士に育てる。それは、生れた時から廬陞と結ばれることが運命づけられている前提があり、この夫との生活が崔少玄の謫期の全てであることを考えると、結婚という俗世のしがらみの中で生きることが課せられた罰であったのかもしれない。しかし、この説話は伝奇小説としてはほとんど完成した形態であり、詩文の応酬など読者を意識した設定が処々におかれる。崔少玄の父が刺史であることから考えると、廬陞も同等以上の官職にあつたとみてよい。非常な美女とエリート官僚の結婚である。こうした設定自体がすでに唐代伝奇の一つの典型といえよう。

謫仙の状況を分析するはずであつたが、資料の羅列に紙数を費やした。慙愧に堪えないが、援引した文献を読むと、当時の神仙信仰の一斑が鮮明に記録されているものもあり、贅言を必要としないところもある。資料に救われたといふべきであろう。取り敢えずここで擱く。

## 註

- (1) 謫仙については、宮川尚志「謫仙考」(『中国宗教史研究』第一) 同朋舎、一九八一年) が専論として初期のものとなる。その後、李豊楙『誤入與謫降』(臺灣學生書局、一九九五年) が出て、ほぼ主要な資料は明らかにされている。

(2) 甘豆湯が単なる食物か薬湯かは不明。ただし、文中にあるように甘草と豆を煮たもののようである。豆が小豆であれば汁粉の原形に近いが、このあたりも不明。

(3) 神界のパンテオンを視覚的に描いたものに、唐の呉道玄の「神界図」(道子墨寶)がある。これを見るとそれが全て宮廷の模倣であることが分かる。皇帝を頂点としたヒエラルキーが元始天尊を頂点とする神階にそのまま反映される。

(4) 東方朔については『漢書』卷六五に伝あり。

(5) 篠田統『中国食物史』(柴田書店・一九七七年)に、唐代には北方民族との交流が盛んとなり、乳製品が普及した旨の所論がある。

(6) 『老君音誦誡経』(新文豊本三〇卷)

(7) 『陸先生道門科略』(新文豊本四一卷)

(8) 例えば『真誥』卷十に、「道士求仙、勿與女子交、一交而傾一年之藥力、若無所服而行房内、減算三十年」などの記事がある。

(9) 『黄庭経』の成立については、王羲之書写の『黄庭外景経』の摹本があり、『外景経』がすでに四世紀末には存在したことが明らかにされている。『内景経』はこれにもとづいて、宗教性を加えて作られたと考えられる。麦谷邦夫「黄庭内景経試論」(『東洋文化』六二、一九八二年。東大東洋文化研究所)